

恋の吊り橋実験がうまくいくための条件とは

Keywords | 恋愛 | 情動二要因論 | 魅力



カピラノ吊り橋

この目もくらむような吊り橋で、心理学史に残る恋の吊り橋実験が行われた。



恋の吊り橋効果は、恋愛の心理学の中で最も有名な現象の1つだろう。あなたが意中の人と一緒に高所にかかった揺れる吊り橋を渡るとしよう。すると、相手は吊り橋を渡ったことによって心拍が増大し、血圧が上昇する。そして彼(女)はこのドキドキをあなたへの愛情によって生じたものだと誤って認知してしまう可能性がある。この現象が生じると、相手はあなたのことをより好きになるだろう。そのため、デートでは吊り橋、それが難しかったら、お化け屋敷やジェットコースターなどのドキドキするようなアトラクションに行くのがよいと言われるのである。

◆成功率は50%

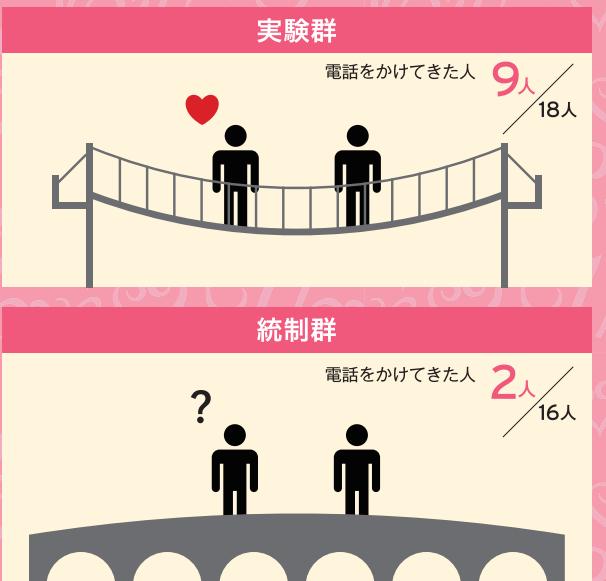
この現象の背景にあるのは、スタンレー・シャクターによって提案された情動の認知説（情動二要因論→058）である。通常、私たちは、感情を次のような経路で感じると考えている。つまり、「出来事→その出来事の解釈→感情」であ

る。恋愛について言えば、「素敵な異性→その人のことが好きになる→一緒にいるとドキドキする」という流れである。感情は私たちの認知の結果やその反応として生じるというわけである。ところが、シャクターは、実際には「出来事→感情→その感情についての解釈」という流れがあると考えたのである。恋愛について言えば、「素敵な異性→一緒にいるとドキドキする→なぜ一緒にいるとドキドキするのだろうか、これって恋かも？」と後で認知するという流れである。つまり、感情は認知に先立って生じ、私たちはそれを後から解釈するというのである。確かに中学生の頃、「何で、いつもあいつの前に出るとドキドキするんだろう、あいつのこと好きなのかな？」といった方向の思考パターンを経験した人は少なくないだろう。

もし、感情が認知の結果として生じるのではなく、認知よりも先に生じるのだとすれば、間違った認知を誘導することができる可能性がある。つまり、吊り橋を渡ることで生じ

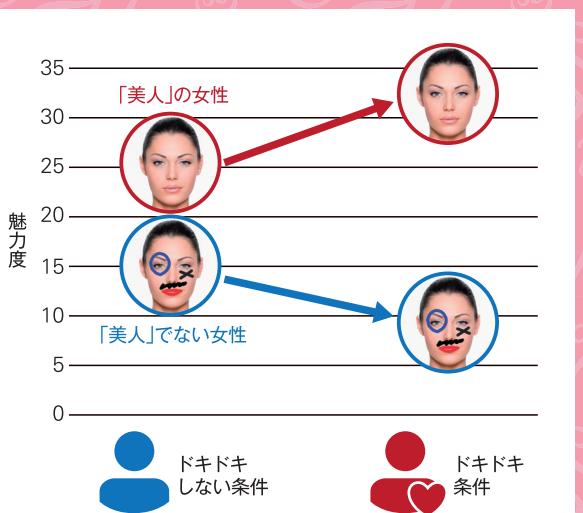
ダットンとアロンの実験

吊り橋での実験（実験群）では、電話番号を受け取った18人のうち9人が電話をかけてきた。低いコンクリート製の橋での実験（統制群）では、16人のうち2人しか電話をかけてこなかった。



ホワイトラの実験

ドキドキしている状態とそうでない状態で女性を見たときの女性の魅力度を実験参加者に評定してもらったところ、「美人」の女性は、ドキドキしている状態のほうが魅力度は高くなかった。一方、「美人」でない女性は、ドキドキしている状態では魅力度が低くなかった。ドキドキがいつも相手の魅力度を高めるとは限らないのだ。



2人しか電話をかけてこなかった。

◆場合によっては逆効果に

この実験は非常に有名になったが、1つの大きな落とし穴がある。それは、橋を渡ったドキドキを恋愛感情と間違えるためには、声をかける女性が「美人」である必要があるということだ。もしそうでなければ、男性は橋を渡ることによって感じたドキドキを正しく橋のせいに認知してしまったり、「こんな女性にドキドキするわけないな」と思ってしまうことが予想される。実際に、その後、メリーランド大学のグレゴリー・ホワイトラがあり美人でない女性（化粧で魅力をわざと低下させている）で同様の実験を行うと、恋の吊り橋効果は生じないどころか逆効果であることがわかった。

つまり、恋の吊り橋効果がうまくいくためには、残念ながら「美人」である必要があるのである。（越智啓太）